
令嬢メイドと『悪魔王子』

黄昏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

令嬢メイドと『悪魔王子』

【Nコード】

N1873V

【作者名】

黄昏

【あらすじ】

おっとりしすぎの両親に育てられた、苦勞性の伯爵令嬢、リリアナ。

両親の面倒から逃れるために王城に仕え始めて早数年、メイド職を紹介してくれた女官長から、第六王子・サファロニア殿下に仕えるように言われました。

『悪魔王子』と名高い彼に会ってみれば、なんだかすっごくズレてる人。

私、これでいいんだろうか……

苦勞性メイドとズレてる殿下のお話。

第1話

メイドの朝は早い。

朝の四時。目を覚ました私は手早く身支度を整える。

髪型をいつもの引っ詰めにして、服のボタンは首もとまできっちり留める。

最後にエプロンのリボンが綺麗な蝶結びになっているのを鏡で確認する。うん、上出来。

今日から新しい主に仕えるのだから、ちゃんとしなきゃ。

満足げに鏡に向かって笑む私に、同室のメイドが話し掛けてきた。

「リリアナ、こんな時間に起きて、よくピンピンしてるわよねー…
…伯爵家令嬢のくせにい…あたし眠くて死にそう…ふああ…
…」

「親がダメだと子どもはしっかりするものよ。私の両親、放っておくと使用人に騙されそうな人で、散々苦労したんだから。ほら、エプロンのリボンが縦結びになってるわよ、アリア。」

のそのそと髪型を整えている彼女のリボンを結び直してやると、まだ目が覚めきっていないような声でありがとうと言われた。……大丈夫なんだろうか、この子。

早めの朝食をとるために、アリアと一緒に使用人のための食堂に向かって歩いていると、アリア同様眠そうなメイド達とすれ違っ。

食堂へ入り適当な席に座ると、近くの席にいたメイドが話し掛けて

きた。

「おはよーリリアナ……うう、ねむいよう……」

「エリカ、ご飯食べながら寝ちゃわないでね？」

「わかってるよお……あれ、なんかリリアナ、今日いつもより気合が入ってる？」

「ええ、今日から新しい主に仕えるんだから」

につこりと微笑んで答えると、エリカとアリアがきよとした顔を向けてくる。

「新しい主……そんな話あった？」

「わたし知らないよお、リリアナちゃん誰のとこ行くの？」

「サファロニア殿下だけど……」

一瞬の間。食堂全体が静まり返った気がした。

「「はあ!!?」」

「リリアナ、ちょっとどういう事よ!？」

「あの『悪魔王子』に仕えるのお!?!リリアナちゃんいなくなっちゃだよう!」

「そうよリリアナ、まだ十六歳の若い身空であの悪名高い『悪魔王子』に身を捧げるつもり!?やめなさいよ、傷モノにされるわよ!」

「き、傷モノって……」

二人の迫力にたじろぎながら、サファロニア殿下の情報を思い出す。

サファロニア・リーベルド・ラトレイユ殿下。この国の第六王子。

彼は六月六日の六時六分六秒に、悪魔の色とされる黒髪と赤い目を

持つて生まれた。

その顔は、母たる王妃の可憐な美貌にも王の端正な顔立ちにも似ておらず、ひどく醜いと言われている。

余りの醜さから王妃に厭われ、王城の一端にある塔に住んでいるらしい。

確か先日二十歳になられたはず。

「で、でも、陛下と、大恩ある伯母さまの頼みですもの、聞かないわけには行かないわ。それに、ちゃんと距離を持って接するし、大丈夫よ！ほら、早くご飯食べなきゃ！遅れたら伯母さま……じゃなかった、女官長に叱られるわよ！」

女官長に叱られる、という言葉に反応して、二人は慌てて食事を始める。

私もご飯を口に運びながら、早くも不安になり始めた自分に、内心溜め息の出る思いだった。

+

+

+

女官長の点呼が終わり、私は騎士さんに連れられて、サファロニア殿下の居る塔へ向かった。

彼はサファロニア殿下付きの騎士だそうで、ニコニコしながら私の質問に答えてくれた。

「殿下はやはり、恐ろしい方なのですか……？」

「あー、そんなことはないですよ？ 温和な性格です。いつも顔が隠れるようなフード付きのローブ着てるからおどろおどろしく見えるだけで。」

「じゃあ、あの……殿下付きのメイドが次々辞めていくっていうのは……」

「あ、やっぱ噂になってるんですね、それ。殿下のせいじゃないですよー？ 全然。あ、つきました。ここが殿下のお住まいの塔です。」

どうして彼女たちが辞めていくのか説明をして欲しかった……！
微妙なもやもやを抱えつつも、説明された通りに殿下の部屋へ歩いていく。

要所要所に騎士が立っているし、たまに下働きらしき女性たちも見かけるので、とりあえずは安心する。塔に噂の殿下と二人きりとか、恐ろしすぎる。

最上階の部屋の、重そうな扉を叩く。すぐに『どうぞ』と返事があるって、私は恐る恐る部屋に入った。

「失礼します……本日から殿下に仕えることになりました、リリアナ・オルデンベルクと申します。」

「そんなに畏まらなくてもいいですよ。俺は大した主ではないですし。リリアナ嬢、こんな主で申し訳ないですが、よろしく願います。」

室内にいた人物が立ち上がって返事をしてきた。

なんというか……ものすごく、いい声。

ずるつずるの、床に引きずるほど長い、着ていると体型も分からなくなるようなだっさいフード付きローブを着ている。フードは目深に引き下ろされており、顔が窺えないようになっている。

そんな外見超アヤシイ人なのに、声がものすごく良い。

うわー、なんだこの残念な人。これで外見良かったら最高だろうに。

「着いたばかりの所で申し訳ないんですが、水を桶に一杯用意していただけますか？」

……はい？

「それが終わったら夕方まで休んでくれて構いませんよ。俺の方から呼び出すこともないと思うので、六時くらいまでなら王城に居てくれてもいいです。」

「ちょ、あの、ご飯とか……」

「朝食はもう食べました。俺は朝が早いので……。」

「お、お昼はどうなさるんですか!？」

「大丈夫ですよ。俺の世話ごときのために、若い女性が長時間こんな湿っぽい塔に居るなんて、良いことではありません。」

優しい声で、有無を言わせずに言い聞かされる。

……私にどうしろと。

とりあえず私は、桶に水を一杯用意することにした。

+

+

+

夕方。

結局、否とさえずに夕方まで王城で休んで来てしまった。

女官長にあれこれ尋ねられたけど、『殿下のご命令で』と言うと頭が痛そうな様子でどこかに行ってしまったので、とりあえず問題はないとする。

夕食を持って塔に戻ると、殿下の部屋の方からやってきた騎士とすれ違った。

……警備に問題でもあったんだろうか？

疑問に思いながら部屋に入る。

「失礼します。殿下、お食事をお持ちしました。」

……ん？なんか血の臭いがする気が……

何だろう？

「ありがとうございます、リリアナ嬢。そこに置いてくれますか。」

「はい」

「ご苦労様。あとは自分でなんとでもできますから、帰っても構わないですよ」

「いえ、でも仕事ですし……」

「夜遅くに女性が一人で出歩くのは危ないよ。騎士を付けてあげるから、早いうちに帰りなさい。」

……そういう問題じゃなくて!!

どうしよう、この人、なんかすごく感覚がズレてる……

そう思いつつも命令に逆らうことは出来ず、行きとは違う騎士さんに連れられて、てくてくと寮に帰る私だった……

第2話

朝にやってきて桶に水を用意し、夜に夕食を運ぶ日々が、半年続いている。

……私、こんなでメイドって名乗ってていいんだろうか……

虚しい思いに駆られつつも、今日も桶に一杯の水を運ぶ。

「失礼します。お水をお持ちしました」

「ああ、ありがとうございます、リリアナ嬢。」

「では……」

「あ、ちよつと待って下さい」

「はい？」

何だろう。

まさか、やっとメイドらしい仕事がもらえる……とか！？

「この半年、リリアナ嬢は休み無しに俺の世話をして下さいましたよね」

「はあ……」

毎日休みみたいなものですが、とは言えない。

「明日から四日間、休みにして構いませんよ。」

「はあ、分かりました……って、ええ!？」

ちよつと待った。

どういう事だ!？

「お、お世話とかどうなさるおつもりですか!？」

「えーっと……代わりの人が来てくれますから……」

『えーっと』って言った。

今『えーっと』って言いましたよこの人！
明らかに嘘ついてるよ！バレバレの嘘を！

「わ、私、何か粗相をしましたか……!？」

これって解雇の危機ですよね!？

「粗相なんてありません！ただ、若い女性が休み無しに働くなんて、
良くないですから。」

「ほ、本当ですか？」

「ええ。」

よ、良かった……！！

「とりあえず、今日の夕食を運んでくれたらそれ以降四日間休みにしていいですよ。五日後の夜に夕食を運んで下さい。」

「分かりました」

五日後の夜、と。

なんで嘘をついているのかは分からないけど、とりあえず解雇の危機は免れたようだ。

そのまま部屋を出て王城へ向かい、ちょこちょこ色んな場所で仕事のお手伝いをしてから少し休んで、六時になったので夕食を運ぶ。

いつも通りのやりとりをして、騎士さんに連れられて城へ帰った。

「リリアナ、お帰り。」

「リリアナちゃん、ご飯食べに行こお？」

「いいけど、着替えてからよ？」

アリアと連れ立って部屋に戻り、メイド服から私服に着替える。

「そうだアリア、私明日から四日間休みもらえることになったんだけど」

「嘘！なにそれ羨ましい！いつもあんだだけ暇もらってその上休日まであんの！？」

「いいなあ、明日から四日間ってことは、騎士団のパレード見に行けるんだねえ……わたしも見に行きたかったよう……」
「パレード？何のこと？」

きよんととして聞き返すと、周りの空気が凍りついた気がした。

……え、何その信じられないものを見る目。

私何かマズい事言った？

「リリアナ！あんた知んないの！？五日後、隣国に嫁いだ第二王女さまが久々に帰ってらっしゃるのよ！」

「騎士団の第一師団と第六師団がわざわざお迎えに行くんだから！大々的にパレードやるのに、知らなかったの！？」

「し、知らなかった……」

たじたじになりながら答えると、何故か他のメイド達まで寄ってたかって騎士団の話を始めた。

「騎士団と言えばやっぱり第一師団長のガーファンクル様よねっ！冷たそうな顔がすっごく格好いいのよ！」

「私はリヴァプール第二師団長！妖精みたいに綺麗で優しそうで、それなのに物凄い強いんだから！」

「ええー！！タミル様の方が良いわよ！第五師団長なのに、気取んなくて爽やかでやんちゃで、たまないじゃない！」

「何言ってるの、やっぱり第八師団長の方が」

……何がなんだかさっぱり分からない……

正直男性にも結婚にもそんなに興味がない私としてみれば、女の子同士の話はあまり面白くない。

だって、みんなの話題になるような男性って、私にはほとんど縁がないし。

私は基本的に叶わない夢は見ない主義である。

生ぬるい笑みを浮かべながら彼女たちの話を聞いていた私だが、ふとある事に気付いた。

「ねえ、第六師団長っていらっしやらないの？」

彼女たちの話は第一から第十までの師団長の話だったはずだが、何故か第六師団長だけがでてこない。

何気ない質問だったのだが、彼女たちは困ったように黙ってしまった。

私、やっぱり何かマズい事聞いちゃってる……？

どうしようかと悩んでいると、アリアが私の問いに答えてくれた。

「第六師団長は……いつも仮面してて、顔が分からないのよ」

「うん、なんかミステリアスな人だよな」

「焦げ茶色の髪なんだけど、あれ染めてるんじゃないかなあ？なんか、のっぺりした色なの」

「あ、言われればそうかも」

「でも、すごく強いよね」

「第二師団長さんと張るくらい強いもんね」

「あと、すごい良い声なんだって」

「でも生傷絶えないよね」

「半年くらい前も、なんか狼かなんかと戦ったとかで怪我したって」

「四力月前も、盗賊に殺されそうになった部下を助けて怪我したらしいよ」

「三力月前は、凶悪犯に追われたおじいさんを助けて怪我したって」

うわー、すごい来歴。

よくそんなに怪我するなあ、6力月前、4力月前、3力月前って、つまり均したら2力月に一度は大怪我してるじゃない。

血の臭いが染み付いちゃいそう……って、ん？

半年前に、4力月前に、3力月前？

なんか、殿下から血の臭いがしたのも、それくらいの時期じゃなかった……？

それに、すごく良い声？

騎士団は明日から四日間出っていて、私の休みも、明日から四日間……

……なんか、変……

それからの話は、まるで耳に入らなかった。

その晩私は、殿下と第六師団長の共通点について、眠ってしまうまで、考え続けていた。

第3話（前書き）

今回、流血描写があります。
苦手な方はご注意ください。

第3話

五日後の朝。

今日は夕方に殿下に食事を運ぶまで、暇だ。

私は王城を抜け出して、十時から行われる、第二王女さまの帰国パレードを見に行くことにした。

「うわぁ、すごい人混み……」

「リリアナ、はぐれないでよ!？」

「アリアちゃん、リリアナちゃん、みんなはぐれないように、手をつなごうよう」

エリカの子供のようなおねだりに苦笑しつつも、三人で手を繋いで、パレードの見やすい場所を確保する。

「まだかしら……」

「あ、あれ！来たわよ、ほら!！」

「わ、ほんとだぁ！ね、ね、アリアちゃん、一番前にいるキラキラの人が第一師団長さん?」

「そうよ! ああ、もう! すごく素敵……」

うつとりとアリアが第一師団長に見入る。

確かに格好いい人だ。長めに整えられた金髪、切れ長の青い瞳に、スツと通った高い鼻梁^{びりょう}、固く引き結ばれた口元がどこか冷たい雰囲気を感じさせる。

正直ちよつと怖そうで、私の好みではない。

私の好みは、全体的に落ち着いた色の髪や目の色をした、穏やかな性格の人である。間違っても第一師団長みたいな人を好きになることはないので、私がアリアのライバルになる事は有り得ないだろう。

そんなことを考えている間にも、きらきらしいパレードは私たちの目の前を通り過ぎていく。

王女さまの乗った豪華な馬車が通ったあと。

騎士団を率いた、奇妙な仮面の人物が現れた。

「リリアナ、あれが第六師団長よ」

アリアが耳打ちしてくる。

みんなの噂通り、仮面を被って、どこかのつぺりした焦げ茶の髪だ。民衆には意外と人気があるようで、ものすごく騒がれている。

確か、彼は過去に何度も民衆のために仕事をしているらしいので、それも当然だろう。

だが、馬を駆る手がどことなくぎこちない。

訝しく思っていると、こんどはエリカが耳打ちしてきた。

「第六師団長さん、また怪我しちゃったんだってえ。王女さまを狙うふらちもの？がいて、庇ったせいで背中を斬られちゃったんだ、って、誰かが言ってたあ」

そういうことだったのか。

今日は、血の臭いがしないかチェックしておこう。

心の中で決意しながら、ふと私は思った。

殿下と第六師団長の関係を暴いて、私はどうしたいんだろう？

答えは出なさそうな気がしたので、私はその疑問を胸の奥にしまっておくことにした。

‡

‡

‡

夜が、やってきた。

私は緊張しながら殿下の部屋の扉を叩く。

……あれ

いつもならすぐに返事があるのに、今日は、部屋の中から何の音も聞こえない。

どうしよう、入っちゃって、いいのかな……？

わずかに悩んで、でも仕事だから、と自分に言い聞かせて部屋へ入ることにする。

「失礼します……殿下、夕食をお持ちしました………ッ!？」

え？

なに、これ

どういう、こと……？

「ひ……ッ」

喉から叫び声にならない声が漏れる。

手が震えだしたことに気が付いて、頭のなかで妙に冷静になった部分からの命令に従って、夕食の乗ったトレイを近くにあった小型のチェストの上に置く。

そして、部屋の奥、寝室の入り口の近く、朱いシミのある所に倒れている、『それ』にゆっくり近づいた。

『それ』は、人だった。

その髪は一見すると黒に見えるが、よく見れば黒百合のように艶やかで美しい、伝説の妖精王のような、濃い紫色。

その肌は、日に当たったことがないかのような白。

その顔は、どこか温かみがあるものの、この世のものではないかのように美しく。

その顔色は、ひどく青ざめていて。

…その背からは、朱い血が今もにじみ出していた。

「い、や、あああああああああああああああああああああああ
ああああああッ!!」

私は、その叫び声をどこか人事のように聞いていた。
部屋の外から、たくさんの足音がする。
彼らが到着するまで、私は気が狂ったかのように叫び続けた――

第4話

「……もう、落ち着きましたか？」

「は、はい、すみません……」

私は恐縮して椅子に縮こまる。

女性にはこりと笑いかけてくれた。

「謝ることなんてありませんよ。こんなに若くて可愛らしいお嬢さんが、あんな現場を見て、恐ろしくない方がおかしいんですから。こういうのも、医者の仕事です。」

私はまだ医者のお卵ですけどね、と彼女は朗らかに笑う。その笑みに、私はとても癒された気分になった。

その後、私の叫び声を聞きつけた騎士が殿下の部屋にやってきて、恐怖のあまり狂ったかのように叫ぶ私と血を流して倒れ伏す殿下を発見したらしい。

彼はすぐに医者を呼び、殿下の治療と、泣き叫ぶ私の鎮静を依頼してくれたのだ。

おかげで私は、女医さんの手によって鎮められたらしいのだが……

「あの……殿下のご様子は……」

殿下が気になって仕方ない。

床に敷かれた濃紺のカーペットに、結構大きなシミができていた、と思う。

大丈夫なのだろうか。

「彼は傷口を縫合ほうじゅうするだけだったから平気ですよ、安心して下さい。」

「そうですか……！」

良かった……！！

殿下は無事だったんだ！

安心のあまり涙がこぼれそうだが、また彼女の手を煩わせるのも何なので、必死で堪える。

「失血してたから今のところ絶対安静ですけど、顔を見るくらいならできますよ。眠ってると思いますけど、会いたいですか？」

その問いに、私は一も二も無く頷いていた。

✦

✦

✦

初めて通された殿下の寝室は、白と黒と金だけで構成された、あっさりとした部屋だった。

大きなベッドの脇に控えていた初老の男性が、私を見てにこやかに微笑む。彼はそつと近付いてきて、私に小声で話しかけた。

「やあ、お嬢さん。気分はどうですか？」

「み、見苦しい所をお見せしまして、申し訳ありませんでした……」「いえいえ、かまいませんよ。殿下の様子を見にいらしたのかな？」

ためらいがちに頷くと、そつとベッドの方へ向かうように促される。

足音を立てないように、すり足でベッドへむかい、上げられた天幕の中を覗き込んだ。

まだ少し顔色は悪いものの、だいぶ血の気が戻ったように見える、綺麗な顔。

ところどころ長さが不揃いな黒紫の長い髪が、シーツの上に散らばる様が、息を呑むほど美しい。

……誰よ、この顔を醜いつて言ったの……

なんとなく恨めしい気分になる。だって、こんなに綺麗な顔、きつと他にはない。さっきも思ったけど、伝説を元にした童話に出てくる妖精王みたい。

全てを凌ぐ美貌を持ち、強く優しい、妖精たちを統べる王。

同朋を夜の悪魔から救う為にその身を夜の王に捧げた彼が、太陽の妖精に救われ、彼女と結ばれる、というお話だったと思う。

「妖精王は、夜の悪魔の手で、その身に纏う色を夜の紫に変えられてしまったのよね……」

呟き、彼の髪にそつと触れる。

この髪も、誰かを守るために夜の色に変えられてしまったのかしら？

柄にもないことを考えている自分に苦笑する。

そろそろ帰らなきゃ……

そう思って寝室を出たのだが。

……あれ？お医者さんたちがいない……

きよろきよろとあたりを見渡すと、机の上に走り書きのメモがあることに気がつく。

ざつと目を通す。内容は、殿下に処方する薬が足りないので一度調合のために自宅に戻るという事と、申し訳ないが殿下の看病をしていて欲しいという事が書いてあった。

「まあ、いいか……」

どうせもう八時だし、帰るのが一、二時間延びたところでどうということはない。元の持ち場では普通に十二時近くまで働いていたこ

ともあつたし。

しばらく、殿下の顔の観察でもしていよう……

そう思った私は、足音を殺して再び殿下の寢室に戻った。
椅子をそつと引いて、座る……つもりだったのに。

ガタタツ！

椅子がカーペットに引っかかって、机とぶつかり、大きな音を立てる。

そのことに、わ、やっちゃった……！！と思う暇もなかった。

その次の瞬間には、私は勢いよく起き上がった殿下の手に引きずられて、ベッドに押し倒されていたから――

第5話

視界一面に黒紫の、夜の色が舞い降りてきた。

消毒液のにおいが鼻をつく。

首筋にひやりと冷たいものが当たる――おそらく、何らかの刃物だろう。

赤みの強い紫の瞳に射抜かれて、私は、動くことができなかった。

背中に冷たい汗が伝うのが、自分でも分かり、私は、喘ぐように息をする。

刹那の瞬間が永遠にすら思えた。

――が、次の瞬間、殿下は慌てた様子で私から離れていつてしまつて、私は少し残念な気分で、自分の身を起こし、今までベッドに押し付けられていた上半身をベッドからおろす。

端麗な顔を片手で覆った彼が呻いたのが聞こえて、私は慌てた。

「殿下！お背中傷はっ……………」

「だ、大丈夫です……………少しひきつれて痛かったただけなので……………」

「な、なら良かったです……………」

……………気付いてしまった。

今この人、上半身は包帯巻いてるだけで服着てないよ！

治療受けてたら当然かもしれないけど！

正直、身内の男性の肌すらろくに見たことのない私には刺激が強過ぎる。貴族は身内にも肌をさらすことはほとんどないし、ここに来るまでずっと第三王女に仕えていた私は男性の着替えを手伝ったこともないから、当然と言えば当然なのだけれど。

殿下って意外にたくましい体をして……って、ああああ何考えてるの私！

真っ赤になった顔を隠すべく俯く。と、何を勘違いしたのか、殿下の困ったような声が謝ってきた。

「すみません、醜いものを見せてしまって……」

……何でしょうか、今の発言。
壮大なイヤミですか？

「……殿下、それ本当にそう思っ言っているんですか？ご自分が醜いと？」

「え……だって俺の顔は醜いと噂になっているのは知ってますし……俺の顔を見たりリアナ嬢は顔を逸らしてしまいましたし、よほど醜いのでは？」

「殿下、鏡見てください。何年自分の顔見てらっしゃらないんです

か」

「え……つと、多分十五年くらい……」

なにそれすごい。

……十五年鏡で自分の顔を見てないって、どんな人間なのよ！

私はメイド服のポケットをまさぐって、小さな手鏡を殿下に渡した。

「それで自分の顔をじっくり見て下さい！どこが醜いんですか！」

「……綺麗な鏡ですね」

言つと、殿下は物珍しげに鏡の観察を始めてしまった。

……本当に、この人は……！

私は鏡を観察する殿下の手を掴んで、鏡に殿下の顔を映す。

「ほら、全然醜くないじゃないですか！」

「……そうなんですか？」

「そうですよ！」

「……父上にも王妃さまにも、全く似ていませんが……」

「隔世遺伝でしょう！何代か前の国王陛下によく似ていらっしゃるんですよ！目や髪の色も！」

「……九代前の十代目国王、アルベルト陛下ですか？」

「はい！」

怒鳴ったら息が切れた……
荒い息をしている私に、殿下が不思議そうに尋ねてくる。

「そういえば、あなたはなんでここに居たんですか？あと、俺はなんでベッドに寝てるんでしょうか？」

……ああ、もう！
本当に、ほんつとつとに、この人はっ！！

‡

‡

‡

とりあえず、私が殿下が倒れているのを発見した経緯を手短に説明すると、ベッドに横になった（私が横にならせた）殿下は申し訳なさに謝ってくれた。

……そうだ、殿下が倒れてたせいで忘れてたけど、私、殿下と第六師団長との関係を調べたかったんだった。
もういいや、本人に直接問いただしちやおう。
さりげなさを装って切り出す。

「そついえば殿下、その背中^{せなか}の傷はどうなさったんですか？」

あ、殿下の肩がびくん^{びくん}つてした。

……この人、意外に分かりやすい人だよね……

「ちょっと見ただけですけど、なんか刀傷^{やまざり}っぽいですね」

「……」

……目をそらされた。

「でも、この塔^{やぐら}って意外に警備^{けいび}厳重^{げんじゅう}ですし、賊^{ぞく}が入ってくるとか、そついう事があつたら、普通^{ふつう}にもっと大騒^{だいそう}ぎになつてますよね。」

困^{こま}つてるのが手に取るように分かる。

「さつき私^{わたし}を取り押さえた手口^{てぐち}の鮮^{あざ}やかさから考えても、殿下^{けみま}はかなり腕^{うで}が立ちそうだし。」

あ、眉間^{まゐ}にしわ寄^よつてる。

美形^{みけい}はこつという顔^{かほ}も絵^えになるのね……

「そういえば、騎士団の第六師団長さんも、背中に怪我をしたそうですね。第二王女さまを不埒者から守って、負傷なさったとか。」

ちよつと……ていうかだいぶ焦ってる感じ。
言い訳考えてるのかな？

「第六師団長さんは仮面をしてることで有名ですね。素顔を絶対に晒さない。なんだか、殿下と似てますよね」

殿下に口を挟む隙を与えないように、私は、たたみかけるように言う。

「……殿下は、王立騎士団の第六師団長ですね？」

第6話

しばらくは二人とも黙り込んだままだった。

やがて、殿下が沈黙に耐えられなくなった様子で、苦笑いをしながら私の言葉を肯定する。

「……よく分かりましたね。今まで俺に仕えていた人には気付かれたことはなかったんですが。」

「噂を聞いて、何か気になりましたので。」

「……さすがに目立ちましたか？」

「仮面で顔を隠して見るからに髪を染めていて、というのはかなり目立つでしょう」

「……やはり、エリオットに騙されていましたか……」

苦々しく呟いた殿下が溜め息をつく。

エリオットとは誰だろうと思ったが、あまり突っ込んだ話を聞くのもどうかと思うので、話を変えることにする。

「今まで一度も気付かれなかったんですか？」

「はい。皆、俺の方もなくに見ずに、言われた仕事だけして帰ってしまうので、気付く余地がなかったんでしょう。」

「……水を汲んで、夕食を運んで、だけですからね……」

「でも、水がないと髪染めが出来ないので、俺にしてみれば結構重要な仕事なんですよ。仕事をせずに逃げられると、そこは特に困りますね」

本当、ずれてるなあ……

何故に話が水汲みの重要性になるのよ……

「かなり楽な仕事なのに、何でみんな辞めていってしまっんですかね……」

「ああ、それは俺に悪い噂があるから怖いとか、本当に色んな理由ですよ。確か一人目と二人目が仕事をさぼり続けて仕方なく解雇して……三人目は仕事内容にいたく自尊心を傷付けられた、とか言って辞めて、四人目以降はもう、俺が前任者を傷モノにしたとかの噂に怯えてすぐに……」

……この人すごく運が悪いのかな、ひょっとして。

そんなメイドにはかりあたるって、逆にあんまり無いんじゃないの？
メイドは主の命じる仕事を、私情を挟まずに実行するべき、って新人の頃に教えられるものなのに。

私が顔をしかめていると、殿下が心配そうに話しかけてくる。

「リリアナ嬢、どうしてそんな顔をするんですか？せっかく綺麗な

顔なのに、眉間にしわなんて寄せていたら勿体ないです」

ぐはぁ！

こ、この人、何で痛い所を的確につついてくるのか……！！

「……殿下、私のような地味な女にそのようなお世辞を言わないで下さい。」

「地味なんて、とんでもない。確かに化粧とかは派手ではないかもしれないですけど、品がよくて素敵ですし、その金の髪も蒼い瞳も、素晴らしい綺麗だ。俺には、貴方は伝説の太陽の妖精のように見えます。」

は、恥ずかしい……！

何でこんなに恥ずかしい台詞をサラツと言つたのよ！すごく良い声で！

か、顔が熱い……

こつという誉められ方をしたの、すごく久しぶりかも。

メイドになったばかりの頃は、まだ地味を装えなくて、火遊び好きの貴族連中から粉をかけられたものだけど、ここ二、三年は地味な女で通してきたから、そういう文句には縁がなかったし……ど、どうやってあしらは良かったっけ……！？

真っ赤になって焦っていると、寝室のドアが叩かれる音がした。よ、良かった……！お医者さんが戻ってきたのかしら？

急いで椅子から立ち上がり、扉を開ける。

「お医者さん、お疲れさまです……！？」

「……こんばんは、メイドのお嬢さん？」

「エリオット！何しに来たんですか、こんな深夜に」

そこに立っていたのは、王立騎士団第一師団長、ガーファンクル様だった。

‡

‡

‡

「エリオット、彼女にあまり構わないで下さい」

「えー、何でさ。お前に仕えて半年保つ女の子とか、普通に考えて超希少価値のある娘を観察するとか、無理な話だってー」

端正な顔を崩して、にやにや笑いながら私を観察するガーファンクル様を、殿下がたしなめる。

何なのよ、この人！

内心の苛立ちを押し隠して、紅茶を淹れる。ジロジロ見られながら仕事するのは、ものすごくやり辛い。

「どうぞ」

「ありがとう、オルデンベルク伯爵令嬢」

「!？」

何で名乗ってもないのに私の素性知ってんのよ！

そう思った私の内心を見透かしたかのように、殿下が説明をしてくれる。

「エリオットは俺の側近のようなものです。俺の身の回りの人間の素性は全員把握してますよ」

「でも俺がキミの素性を知ってたのは、ここ最近見た中で一番綺麗な顔の令嬢だったからだよ。お世辞じゃなくて、本当に。」

だから何でそういう事を言うかなホントに！

私にしてみれば、この顔は正直、面倒なことしか引き寄せない厄介極まりないもののなに。

昔は本当に、誘拐事件に巻き込まれそうになりまくり（自力で逃げたけど）、ロリコン貴族に金で買われそうになり（親バカ二人がとんでもないと断ってたけど）、その辺の令嬢から恋人を盗られた云々と因縁を付けられ嫌がらせされたりと（たいした嫌がらせじゃなかったけど）、ろくな事がなかった。

あー、やだやだ……

もつと可もなく不可もなくな顔に生まれたかったわ……

思わず遠い目になりかける。

「なあサフィー、そっぴゃお前倒れたって言ってたけど、何やったんだよ」

「ああ……彼女が来る前に、髪の色を戻して血の臭いを消そうと思って湯浴みをしました。湯に浸からなかったから大丈夫だと思ったのですが……」

「うん、血流良くなったせいでやつちやつたんだな？」

「はい」

「馬鹿だろお前。馬鹿だろ。」

「エリオットに言われたくないです。」

……本当、何なのかしらこの二人……
私は深い溜め息をついた。

第7話

殿下が王立騎士団第六師団長だと知ってから、早くもひと月が経とうとしていた。

殿下の背中への傷は結構ひどかったもので、さすがにこのひと月は、私が高んやかんやとお世話をしている。

やっともらえたメイドらしい仕事に、心が弾む。

「殿下、朝食をお持ちしました。食べ終わったら薬を飲むのを忘れないで下さいね？」

「はい……」

「包帯をかえますから、後ろを向いて下さい」

「じ、自分で……」

「いけません。また傷口が開いたらどうするんですか、ほら、後ろを向いて！」

「殿下、午後からお医者さんの診察があるそうです」

「もう大分治ってきましたし、そろそろいいのでは……」

「駄目です。そう言っただけで昨夜は薬を飲み忘れて痛がったじゃないですか」

「……」

私がくるくると仕事をしているのを見ながら、殿下が溜め息をつく。

でも、正直きちんと怪我を治して今後に響かせない方が、治しきらないで悪い影響を与えられるより重要だと思うので、心を鬼にして殿下のお世話をする。」

「こんにちは、メイドのお嬢さん。サフィーの調子はどう？」

「きゃあっ！が、ガーファンクル様！どこから湧いて出たんですか！」

「湧いて出たって……ひどいなあ。この塔の秘密の通路からだよ？」

「ひ、秘密の通路、ですか？」

聞いたことがない。この塔、そんなものがあるの？

説明を求めて殿下の方を見ると、ああ、と言って説明してくれる。

「この塔のできた経緯を知っていますか？」

「え……三代目の国王陛下が天文学に造詣そうけいの深い方で、当時の天文学者が集中して研究ができるように、と建てた、というものなら……」

「表向きはそうですね。」

「表向き？」

「はい。実際は龍姫を囲うための塔でした。」

「かつ……」

囲う、って！

ていうか、なんて不純なっ……

「当時は後宮もあつたと思いますが、身分が低くて迎えられなかったでしょう。ただ、一天文学者の塔に、王が毎晩、一晚中入り浸っているのはさすがに目立ちすぎると考えたのですね。塔の裏にもうひとつ、隠し階段と出入り口を作ったんです。」

「メイドのお嬢さん、ここに初めて来た時、思わなかった？あつちこつちに騎士がいるなあつて。」

「あ、少し、思いました……」

通路のいたるところに騎士がいて、なんとなく安心した、とは言えない。

「あれね、隠し階段に場所を取られてるせいで、塔の外見の広さと実際の広さが違うのをごまかすために配置してるからなんだよ。ちよつと勘の鋭い人がおかしいなーって思っても、あちこちに人がいるから狭く感じるんだ、って思ってくれるからね」

「そうだったんですか……」

知らなかった……

殿下がどうやってこの塔を抜け出しているのか気になってはいたけど、そんな仕組みがあつたんだ。

「ところで、今回は何の用でわざわざここまで来たんですか。筋力なら、落ちないように最低限の訓練はしてますから、大丈夫ですよ。」

「んー、ちよつと色々な。そしてお前何故俺が筋力の話をしにきた

と思ったのさ。違うから。普通に違うから。」

「……じゃあ何の話ですか？また部下が俺の見舞いに来たいと騒いでいる話ですか？」

「いや、それも違うからな？いや、それも問題だけどさ。つーかお前の中で俺は騎士団関連の話しかない奴になつてんの？」

「そうですね」

「……肯定しちゃったよ。こいつ肯定しちゃったよ。ねえ誰かこいつどうにかしてー……」

ぐったりとしているガーファンクル様。でも、それを私がフォローする謂われはない。

「で、最終的に何のご用なんですか？まさか与太話よたばなしをするために来た訳ではないんでしょう？」

素っ気なく言うと、恨めしげに見上げられる。……私をそんな目で見ても、何も良いことはないですが。見ないでください何かが減ります、とは言わないでおこう。

「……真面目な話、まずいことになった。」

「何があつたんですか？」

「国王陛下と第二王女さまが第六師団長に直々に礼をしたいそうだ。」

「……冗談でしょう」

殿下の顔から血の気が引いている。

……まさか、陛下に秘密で騎士団員やったの……？

「残念ながら本当だ。今までにも似たような申し出があつたんだが、全て辞退しておいた。しかし、今回は訳が違う。救ったのが王女さまだからな。」

ああ……今まで助けた一般市民とは違うものね。さすがに辞退は難しいでしょう。

「だからといって……っ！無理ですよさすがに！いくらなんでも、声やらなにやらでバレます！」

「分かつてる！だが、もう限界だ。お前の素性も疑われ始めてる。平民の出だとかまかしてきたが、王の情報網に全く引っかからないから。」

焦ったようなガーファンクル様の怒鳴り声に身がすくむ。

確かに、一貴族がでっち上げた人間の素性を、偽物だと看破するのは、王にとっては容易いはず。

この国で一番権力があり、人望があるからこそその王なのだから。

「……王は、一週間後の第二王女さまが隣国に帰還なさる前日の宴で、素顔の第六師団長との面会をお望みだ。」

素顔で、面会！？

それは……さすがにごまかせないわね……

一体、どうなってしまうのかしら……

第8話（前書き）

今回、重い話です

第8話

重苦しい沈黙が室内に満ちている。

そんな中、殿下が絞り出すような声を出した。

「……すいません、エリオット。気持ちの整理がつきません。……今日は、帰って下さい。」

「すまん……力になれなくて」

「エリオットは十分力になってくれますよ。……俺の問題なんです。」

ガーファンクル様の顔が苦しげにゆがむ。

……私は、ただ黙っていた。私が口を挟んでいい話じゃ、ないから。

「……明日、また来る。悪いが、時間がない。対策を練らないといけないから……」

「分かりました……」

ガーファンクル様は、殿下の返事を聞いて、ゆっくりとした動作で部屋を出て行った。

後には、私と殿下だけが残される。

……気分の落ち着く紅茶でも、淹れて差し上げよう。
今は、しばらく一人にしておいた方が、良いかもしれない。

そつと部屋を出て、階段を下り、一番はじめに見つけた下働きの女性に、お湯を用意してくれるように頼む。

この塔の一階には、小さいながらもきちんとした厨房があつて、ちよつとした食堂もあるのだ。料理人さんもいるので、お茶請けのお菓子なども、頼めば簡単に作ってくれる。

一階の厨房で紅茶を選び、茶器を適当なものを棚から下ろす。手早く茶器を磨いて、頼んだお湯と、お菓子を持って部屋へ戻ると、殿下はくたりとベッドに突っ伏していた。

「殿下、お茶をお持ちしました……大丈夫ですか……？」

「大丈夫、ではないです……情けないですね、本当に。父上に黙つてこつという事をしてたのに、バレた時の覚悟なんて、まるでできていなかった。」

「……」

「宴で、という事は、王妃さまもいらつしゃるのでしょうね……。悪魔の王子が出てきたら、きつと、気味悪がられるかな……」

ぼつり、と殿下が呟く。

こちらに向けたその背中が、とても寂しげで。途方に暮れた子供のようで。

私は紅茶のトレイをベッドのサイドテーブルに置いて、そつと殿下の髪を撫でた。

「……殿下の髪の色も、瞳の色も、悪魔の色なんかじゃ、ありませんよ。とても綺麗で、素敵な色です。優しい夜の色です。伝説の妖精王みたいで、私は凄く好きですよ。だから、そんな寂しいこと、仰らないで下さい。……私の『好き』を、否定しないで下さい。」

ゆつくりと、一言ずつ、言い聞かせるように語りかける。
私が今できることは、これくらいしかないから。
優しく優しく、語りかける。

と、殿下がむくりと体を起こした。驚いて髪から手を離れた私の体を、ぎゅうつと抱きしめる。

「……俺がまだ幼くて、王城の別棟に軟禁されていた頃、母親恋しさに、部屋を抜け出して、王妃さまのお部屋を訪ねたことがあったんです。」

「……はい」
「五歳くらいだったかな……。俺は迷いながらも、なんとかたどり着いて……。王妃さまを見つけて、嬉しくて……。でも、それだけで良かったんです。すぐに帰ろうと思って、俺は部屋の前から、離れようとして……」

「……」
「そこに、若いメイドが通ったんです。俺は逃げようとしたんです

けど、彼女は、俺を、どこかの貴族の子供と勘違いしたみたいで…
…王妃さまのところに連れて行かれて……」

「殿下……」

「王妃さまは、俺を見て叫んだんです。『近付かないで』『悪魔の子』『あなたは私の息子じゃない』『その醜い顔を見せないで』……」

ひどい。

私は唇をきつく噛み締めた。

自分の息子に、そんな事を言うなんて。

彼の髪や目が悪魔の色をしていないことは、よく見れば分かるでしょうに。

嗚呼。

何てことを。

この人をその言葉でこれほど傷付けられるほど、貴方はこの人の『母親』だったのに……

「俺はその場から、必死で逃げました。王妃さまから向けられる眼差しすら怖くて、逃げて、逃げて……自分の部屋に戻っても、ずっと王妃さまの言葉が耳に残っていて……」

「殿下」

細かく震える肩を、背中を、そっと抱きしめる。
こんなに情けない彼が、とても愛おしく思えて、慰めてあげたくて。

陳腐なことしか言えないけれど、そつと彼に話しかける。

「辛かったですね……悲しかったですね。苦しくて、痛かったですね……。お母さんに会いたくて、それでも姿だけで我慢しようとして、偉かったですね……。」

優しく背中をさすると、先ほどまでより強い力で抱き締められる。

「あなたは、悪魔の子なんかじゃないです。醜い子なんかじゃ、ないんです。強くて優しい、とても素敵な人、なんですよ。みんなを守って、傷ついて、それでも頑張ってるんですから……。」

殺しきれなかった低い嗚咽が、聞こえてくる。

私の肩口に埋められた彼の頭をそつと撫でて、囁く。

「もう、逃げる必要なんてないんです。自分を誇って下さい。頑張ってきた自分を、自分が認めてあげなくてどうするんですか。……あなたは、私にとって、誰よりも素晴らしいひと、なんですから。」

声を押し殺して泣く彼が、眠りにおちてしまうまで、私は彼を抱きしめていた――

第9話

ちゅんちゅんちゅん……

小鳥の鳴く声が聞こえる。私は上体を起こそうとして……
あ、あれ？何か、私の体に絡みついて……
ぱつと目を開けると、目の前に殿下の顔があった。

……

……

……

……え？

ちよつと待ったあああああ！

私は必死で昨夜の記憶を思い出す。

ええと、昨夜は、確か……陽も沈んだ頃にガーファンクル様がいらして……色々お話して、ガーファンクル様が帰ったあとに、殿下がふさぎ込んでしまつて、お慰めして……

泣き疲れて眠ってしまった殿下の腕が外れなくて、悪戦苦闘してるうちにだんだん眠くなつてきて、そのまま眠っちゃったんだ……！！

と、いうことは……

そろそろと体を見下ろすと、寝乱れてしわだらけになったメイド服が。

おまけに化粧も落とし損ねた。

しかも、お風呂入ってない……！！

「さ、最悪……」

小声で呟いたつもりだったのだが、その声に反応して、殿下がもぞりと動く。

「ん……リリアナ嬢……？」

「も、申し訳ありません、寝てしまったみたいでっ……す、すぐに離れますので……」

「……離れないで下さい……」

「!？」

ぐっ、と先ほどまでより強く抱き寄せられる。
って、首筋に顔がつ……お風呂入ってないのに！

「殿下、駄目です！わ、私、お風呂入ってないですし……」

「大丈夫ですよ、いい匂いがします……」。

「においを嗅がないで下さい……っ!」

寝ぼけてますよね？

これ完璧に寝ぼけてますよね!?

以前（首筋にナイフ突きつけられたとき）も思ったけど、殿下ってひよっとして物凄く寝起きの悪い人なんですか!?

一人であわあわしながら、なんとか殿下の腕の中から抜け出そうとする。

しかし、離れようとすればするほど腕の拘束が強くなるのだ。

ど、どうしよう……!?

「おい、サファイア起きて……………」

勢いよく部屋に飛び込んできたガーファンクル様と、目が合った。視線が交わったのは一瞬。

「…………えーと、お邪魔しました?」

「お邪魔じゃありません何か多大な勘違いをしないでください!殿下はいい加減寝ぼけてないで起きてください!!!」

私の悲鳴は、一階で働いていた下働きの方々のところまで届いていたらしい……

+

+

+

「リリアナ嬢、本当に申し訳ありませんでした……」
「……いえ、お風呂も貸してもらっちゃいましたし、こちらこそ大騒ぎしてすいませんでした……」

微妙な空気が漂っている。

あの後、完全に目が覚めた殿下は狼狽して変な事を言い出すわ、それを面白がったガーファンクル様がからかい半分で場を引っ掻き回すわで、何かなにやら分からない状態になってしまった。

とりあえず私は塔のお風呂を貸してもらい（化粧は断念）、メイド服をなんとか見られる状態にして（お風呂の蒸気に少しだけ当ててシワを伸ばした）、殿下の部屋へ戻り、昨夜泣いたせいで赤く腫れた殿下の目元を冷やしているうちに、先ほどのような会話になったのだ。

き、気まずい……

「それはそうと、サフィー、昨夜の件なんだけどさ。」

「……何ですか？」

「サフィーの正体がバレるのはどうにもならないから一旦置いておくとして、少なくともその後流れる噂とか微妙な空気とか、そういうのを緩和する策を俺なりに考えてみた。」

この人、ちゃんと色々考えてる人なんだ、と思ったが、心の中に押し込めておく。

「それで、その策なんだけど、メイドのお嬢さん……いや、オルデンベルク伯爵令嬢の協力が要るんだよね。」

「は、はい!？」

私が協力!？

うわぁ、なんだかいやな予感がひしひしと……

でも、何だか断れない空気が漂っている。

……あーもう、しょうがない!ちょっと嫌な目にあつぐらいなら我慢しよう!

「……どういう策なんですか？」

「お、乗り気？」

「乗り気ではないですけど、仕える主のためですから」

「ふーん、まあ、こういう策なんだけどさ……」

+

+

+

「じゃ、当日、演技よろしくねー」

「分かりました……」

「はいはい……」

策というかなんというか……
まったく、あの人は！

「……すいません、俺の事情に巻き込んでしまつて……」
「大丈夫ですよあれくらい。なんとか我慢しますから。」

遅い朝食の手配をしながら、殿下を安心させるように明るい声で言う。

私はメイドなんだからそんなに恐縮しなくてもいいのに、この人はものすごく心苦しそうな顔をする。

この人は、もうちょっと傲慢でも許されるだろうに。

「……殿下、私はあなたを厭わしく思ったりしませんから、そんなに恐縮しなくてもいいんですよ」

「……」

「大丈夫ですよ、ちゃんと殿下が好きですから。」

「好き、ですか？」

「ええ」

「……俺も、リリアナ嬢が好きです。」

「ありがとうございます」

につこり笑って返すと、にゅっと殿下の腕が伸びてきた。

私は体のバランスを崩して、ベッドに座る殿下の膝の上にくずおれる。

「で、殿下!？」

「リリアナ嬢……」

殿下の綺麗な顔が近づいてきて……

……あれ？

これってキスされる感じですか？

慌てて逃げようとしたが、腰と頭を押さえている殿下の手はちつと

も緩まない。

え、ちょっ、待っ……！

きゃー……っ……！

- 僅かにかさついた熱い唇が、私のそれと、重なる。

そのまま、何度も触れるだけのキスをされて、解放される頃には殿下の唇の熱が私の唇に移ってしまっていた。

「……俺の顔を綺麗だと言ってくれた時から、好きでした」

「だ、だからといっていきなりキスって……！」

私の言った【好き】と、殿下の【好き】は、意味が微妙に違ったようだ……

うう、初めてだったのに！

「嫌、でしたか？……俺のこと、嫌いに、なりました……？」

「……嫌じゃなかったですし、嫌いにもなってませんよ！」

そう。それが大問題なのだ。

嫌じゃなかった。

普通、ただ親愛の意味で好きなだけの相手にキスをされたら、嫌な

はずなのに。

これって、私が殿下のことを、親愛の意味で【好き】じゃなくて、その、愛してる、って意味で【好き】って、こと……！？

そ、そういえば、いつだったかにアリアが『キスが嫌じゃなかったら、それは相手が好きだってことよ！』とか言ってたかもっ……
わ、私、殿下がそういう意味で好きだったの……！？

顔を赤くしたり青くしたりして、呆然としている私の頬に、殿下のキスが降ってくる。

「……何を考えているんですか？」

「……」

言えない。

まさか、たった今自分の気持ちを確認したなんて、言えない。
目をそらすと、耳にふつと息を吹きかけられた。

「……！？」

「今は、俺のことだけ、見てて下さい……」

それから一日中、私が殿下に何をされたのかは、とても言えない……

第9話（後書き）

急展開ですいません……

第10話

宴の日の、朝がやってきた。

殿下の塔の中は、かなりの大騒ぎだ。

「この衣装はどこに置くんですか!？」

「誰か靴がどこにあるか知らない？」

「きゃーっ! 誰よ今あたしの足触ったの!！」

「そんなことより、櫛くしがないんだけど!！」

事情を知っている下働きの女性たちは、いつもより早い時間から仕事を始めてくれている。もちろん私も、殿下の身支度に忙しい。

「殿下、髪を揃えますから動かないでください!」

「分かっていますよ。」

長く伸びて背中にかかっている髪は、ところどころ不揃いなので、できるだけきれいに揃えておく。

見られる状態になったところで、ブラシを使って切った髪を払い、櫛で、絡まったりしないように丁寧に梳いて整える。

ついでにに男性用の香水を首に軽くふりかけてやると、殿下がいきなり香水瓶を持ったままの私の手を掴んだ。

「……？殿下、どうしたんですか？」

「リリアナ、少し首を傾けて下さい」

「？」

言われた通りに首を傾けると、殿下が私の手から香水瓶を奪って、首の後ろあたりに香水をふりかけた。

冷たい水がふりかけられたのに驚いて、私が首をすくめると、殿下がにっこり笑って言う。

「おそろい、ですね。」

「……これがしたかったのか。

害のない悪戯と言うことにしておこう。どうせこの匂いはそこまで男性的なものでもないし。

「ほら殿下、ローブを着せますから、後ろを向いて！」

「はいはい」

私の方に背を向けた殿下の頭にフードをかぶせ、彼の前にまわってロープの裾丈が長すぎないのを確認してから、首から胸にかけてあるボタンを留め、飾りのベルトを締めて、一度彼から離れてから、おかしいところがないか確かめる。

「……あとは仮面を着ければ完成ですね。ロープの脱ぎ方は分かります？」

「ええ。ベルトを外して、ボタンを取ってしまえばいいんでしょう？」

「ボタンは割と簡単に外せますから。指先でボタン穴に軽くボタンを押し込むようにして外して下さいね」

「はいはい」

「じゃあ仮面を着けますから、ちょっと屈んで下さい」

「ああ、少し待って下さい」

「はい？」

殿下を振り向くと、頬に、柔らかい感触が。

……ああ、キスしたかったのね。

なんとなく呆れながらも、仮面を両手で持つ。

「ほら、屈んで下さい」

「……リリアナからは、キスしてくれないんですか？」

……して欲しかったのか。

私は小さなため息をつくとき、覚悟を決めて彼の唇に軽くキスをした。すぐに体を離して、驚いて固まっている彼が何か言い出す前に、仮面をかぶせて金具を留める。

「殿下、ご健闘を」

「……リリアナ、愛しています。浮気しないで下さいね。あなたの
もとに、戻りますから」

「分かってます」

仮面の奥で彼がちよつと笑うのが分かった。

……あー、恥ずかしい。

手早く周りに散らばった用具を片付けて、殿下を先導して部屋を出る。

扉の外では、正装に身を固めたガーファンクル様が待っていた。

「サファイー、大丈夫だな？」

「ええ。」

「オルデンベルク伯爵令嬢、お疲れさま。下の部屋に俺が手配した

侍女と、衣装一式が揃っている。宴に間に合うように来てくれ。」
「承りました。」

ガーファンクル様に連れられていく殿下を見送ってから、私も身支度のために階下の部屋へ向かう。

室内には三人の侍女がいて、私は部屋の扉を開けた次の瞬間、部屋に引きずり込まれた。

「さあさあ、そんな野暮ったい使用人メイクは早く落として下さいな！」

「髪を巻かせてもらいますわ！ああ、なんてきれいな御髪でしょう

……」

「まあ、コルセットなしでこんなに細いなんて！うらやましい……胸もしっかりありますし、着飾らせ甲斐がありますわ」

…… 久々過ぎてものすごく恥ずかしい……

十二歳くらいから着飾ったりしなくなっちゃったし、人に着替えやら何やらを手伝ってもらうのも久々。

何もしないうちに飾られていくのが、なんとも不思議な気がする。

「…… あら、香水はもっつけていらっしゃるのですか？」

化粧を担当してくれた侍女に聞かれて、慌ててはいと答える。

「そうですか……よくお似合いの香りです。私もまだまだだわ……！」

何故か悔しそうな侍女さん。私、何かマズい事したのかしら……

考えているうちにも、どんどん身支度が進んでいく。

久しぶりに着た絹のドレス。うん、普通に重いわこれ……

瞳の色に合わせて青い大粒の宝石をあしらった、限りなくシルバーに近いゴールドの地金の首飾りに、細い金や銀の棒を幾本も絡み合わせた髪飾り。耳には青紫の宝石のイヤリング。

ドレスは涼しげな青で、ところどころに薄紫の花やリボンの飾りが付いている。

完成した私の姿を見て侍女さん達が満足に頷く。

「完璧ですわ」

「ああ、楽しかった……！こんなに飾り甲斐のある方は本当に久しぶりでしたわね！」

「オルデンベルク伯爵令嬢さま、またこのようなご用の際はお呼び付けくださいね！腕を振るわせていただきますわ！」

「あ、ありがとうございます！」

三人にお礼を言って、急いで部屋を出る。

ドレスの裾が汚れないように軽くたくしあげて、塔の外へと急いだ。

第11話

塔の外へ出ると、そこには既に大きな馬車が停まっっていて、その隣には若い男性が立っていた。私は慌てて彼にお辞儀をする。

「お待ちせして申し訳ありません、リヴァプール侯爵！」
「大丈夫ですよー、全然待つてないですしー。」

- 彼と私が、殿下から注目を分散させるための、材料。
妖精のような美貌のリヴァプール第二師団長と、盛装した私が、揃ってこの宴に出席すること。

世のご婦人方はゴシップネタが好きだから、と言うことらしい。
……というかコレ、私が後から絶対リヴァプール第二師団長ファンのご令嬢方に突き上げを食らうわよね……
今から覚悟しなきゃ……

そんなことを考えながら馬車に乗り込むと、そこには第二師団長以外の先客が二人いた。

一人は十代前半らしき可愛らしいドレス姿の少女、もう一人は……リヴァプール第二師団長そっくりの男性。
そっくりさんにしては似すぎているなあと思いながら、チラチラ彼の方を見ていると、男性が不機嫌そうに話し出した。

「……見られるのが不快だから言っておくが、俺はこいつの弟だ。セルシウス・リヴァプール。で、こっちはこいつの婚約者。ティナ・シェーン子爵令嬢。声が出ないので、彼女は筆談がメインで会話する。」

「よ、よろしく願いします、セルシウス様、ティナ様」

セルシウス様はふいつと明後日の方向を向いてしまったが、ティナ様はにっこり笑ってドレスのポケットから出した手帳に、きれいな字で「こちらこそ、よろしく願いします」と書いて見せてくれた。

「あ……でも、婚約者さんがいらっしやるのなら、今回の件はご迷惑ではなかったのですか？ええと……」

「ああ、アルフレートで構いませんよ？二人ともリヴァプールですし……。今回の件は、普通に面白そうだったから参加したんです。ティナも面白そうだって楽しみにしてましたし」

アルフレート様がティナ様の方を見てにっこり笑う。

仲が良さそう……でも、見た感じ、結構歳が離れてそうよね……
聞いておいた方がいいかしら？一応、今日の宴に途中まで参加する訳だし、まったく三人のことを知らない、っていうのもマズいわよね……

「あの……皆さん、何歳なんですか？」

「……俺は21歳だ」

「僕は23歳ですよー」

ティナ様が手帳にペンを素早く走らせて見せてくれる。

えっと……

“私は18歳です”

……え！？

思わず驚きの声を上げようとしてしまい、必死でこらえる

「私より、二歳年上なんですか」

なんとか平静を取り繕った声で言うと、彼女はにこにこしながらさ
らに手帳に文字を書き連ねる。

“よく13、4歳に間違われるんです。実年齢を言うとみんなに驚
かれちゃいます。リリアナ様はあんまり驚いてないみたいですね”
「いえ、すごく驚きました……でも、普段メイドをしているので、
結構突拍子のない事に耐性があるんです。」

「あの第六師団長の世話役なんだから、確かに色々動じていられな

いですねー」

言われた言葉にぎょっとしてアルフレート様のほづを見ると、彼はやはりにこにこ笑いながら教えてくれた。

「今回の件に協力するに当たって、第一師団長に教えてもらってたんですよ。その様子だと、リリアナさんは俺達が事情を知ってることを教えてもらってないみたいですけどねー」

にこにこにこ。

こ、この人、何考えてるか分からない……！
なんだか彼に対する警戒心が強くなった私は、きっと悪くないと思う……

第11話（後書き）

これから更新が滞るかもしれません……
詳しいことは活動報告にかいてあります。

第12話

馬車に乗ったまま王城の裏門をくぐって一度城外に出る。

塔の方からだと、馬車を停めるための場所に入れないから、だそう
だ。

正門に回るまでの間、私と三人は多少の情報交換をして、私とアル
フレート様の関係の適当な設定を作り上げるようになった。

「とりあえず、許婚未満の関係、って事でいいですか？僕とティ
ナはまだ婚約を発表してないですけど、その辺はちゃんとしておか
ない」と

「ふん、両親が知り合いだとかか？」

「あ、その設定いいですね。アルフレート様、それでいいですか？」

“幼なじみと言うと色々突っ込まれそうなので、それなりに仲はい
いけれど、そう頻繁には交流がなかった、という風にされた方がいい
のではないでしょうか？”

「それもそうですね……事実、私ほとんど皆さんのこと知りません
し。」

「ティナは賢いねー」

にこにこしながらティナ様の頭を撫でるアルフレート様。

……うん、眼福。

ティナ様すつごく可愛い。

なんか、こういうのって良いわねえ……

「おい、どうでもいいがそろそろ着くぞ」

「あー、そうだ。城の中に入ったらちよつと性格が違って見えるかもしれないけどー、ちゃんと僕ですからー、気にしないでくださいねー？」

「は、はあ……」

性格が違って見えるって……

猫かぶりでもするつもりかしら？

疑問に思いながらも、隣に座っているティナ様を見ると、ちよつとつまらなさそうな表情をしている。

やっぱり宴に出たくなかったのかしら……

「ティナ様？」

声をかけてみると、ぱつと顔をあげる。

「えつと……大丈夫ですか？」

“ すいません、城の中に入ったら、アルフレート様がいつつも構ってくれなくなっちゃうから、つまらなくて……”

苦笑いする彼女。

こんなに可愛い子を構わないって、どんな猫を被ってるのよ。むしろさっきまでアルフレート様はティナ様をべったり構っていたから、彼女に冷たくしている様子が想像できない。

というか、城に一緒に来ることはあるのに、まだ婚約発表してないって……なんで？

私の疑問がなんとなく分かったのか、アルフレート様がいつもの笑顔で理由を教えてくれる。

「結婚ギリギリで発表するつもりなんですー。だって、ティナが僕の親衛隊とやらに制裁とやらをされたら、いくら相手が女の子でも、手加減出来る自信がありませんー」

……さらつとヤバい事を言うなあ、この人……

ティナ様が嫌な目に遭ったら、全力で殺るつもりなんだろうなー。わー、敵に回したくないー！

私がそんな事を心の中で思っているうちに、城に着いたようだ。

御者のおじさんに馬車を降りるように促される

時間が早いために、まだ人影もまばらだったので、とりあえず全員で宴の会場に向かう。

忙しく立ち働くメイドさん達に、私は心の中で謝る。ただでさえ忙しいのに、私はこうしてドレスを着て、宴に参加しているのだ。な

んだか罪悪感。

いや、これもある意味仕事だけど。

会場へ入る順番は身分の高さ順と決まっているので、とりあえず控え室で待機する事になる。

男性と女性で別れているので、私とティナ様は一旦二人と別れるのだ。

「会場に入ったら声をかけますからー。あ、ティナのことよろしく
お願いしますねー」

「わかりました。」

「ふん、じゃあ後でな」

“二人とも、会場で会いましょうね”

私たちは女性用控え室のドアを開けて、中へ入っていく。

今のところ誰もいないようで、がらんとした広い部屋の中は静かだ。
でも、もうしばらくすれば、人がたくさんやってくるだろう。

そうすれば・・・ここは、小さな戦場と化す。

きらきらしい衣装に身を包んだ女性達の、駆け引きの場所。

私は深く息を吸い込む。

外からざわざわとした話し声が聞こえてきた。
さあ、気合いを入れていかねば。

身動きするたびに漂う殿下の香りが、心強い。

彼のために、精一杯噂の種にされてやろう。

覚悟を決めて、私は扉を見つめた。

さあ、戦いの時間だ

第12話（後書き）

お気に入り登録1000件突破しました！ありがとうございます！
これってなんか記念企画みたいなのがあった方がいいんでしょうか？

…？

ちょっと分らないです。

えっと、やった方がいいって人いますか？

むしろ本編を頑張って進めた方がいいんでしょうか？

意見等ありましたら、感想版にお願いします。

第13話

控え室の中は、すぐに人で溢れかえるほどになった。

メイドとして王城に仕えていれば、だいたいの貴族の顔や名前、ついでに本性なんかも分かるので、ヤバそうな人を極力避けて、評判のよいご婦人や令嬢方に話し掛けて、適度に社交会の情報を集めていく。

「そういえば、最近ドーリツシユ子爵令嬢は第二師団長さまにフラれて、今回の宴にもご参加なさらないのですって」

「まあ、私の聞いたのはバード公爵令嬢が第六師団長さまの仮面を無理矢理外そうとして、第一師団長さまに訓練場への出入りを禁じられたというものでしたわ」

「あら、私はミリア伯爵婦人が第四師団長さまになにか無礼を働いたと……」

うん、色々と明け透けに伝わってるのね……

公爵令嬢の話は私も殿下から聞いている。なんというか、親にベタ甘に甘やかされた令嬢の典型だって、メイドの間でも噂になってたし。

私もティナ様と一緒ににこにこ微笑みながら彼女たちの話に当たり障りのない相槌を打ち、適当な話題を提供しつつ談笑する。

宴が始まるまで、あと五分程度かしら？

とりあえずはなんとか切り抜けられそうだと安堵した、その時。

「……ちよつと、貴方。見ない顔ね。新入りのくせにこのわたくしに挨拶をしないなんて、どういう了見なんですか？」

……うわ。

来ちゃった。さっきまで話に出ていた、バード公爵令嬢が。

「聞いてますの！？貴方、このわたくしを無視しようなんて、とんだ身の程知らずなんですのね！身分の程が知れますわ、この端女^{はしため}！誰がこのような女を連れ込んだのかしら、汚らわしい！」

……あらあら……

この子、公爵令嬢の割に、貴族の顔の把握とか、まるきり出来てない……

確か18歳だったはずだし、私が社交会デビューした時の舞踏会にも出ていたはずなんだけど。

まあ仕方ないか、国民なら誰でも知っているほどに、吝嗇家^{りんしよくか}かつ艶^え福家^{んぷくか}で、その上無能と有名な、バード公爵家の血を引いているのだものね……

うう、やっぱりこういうワガママっ子の相手はイラつく……

「お久しぶりですわね、エリーゼ様。王女様の部屋で会って以来です。で、半年ぶりでしょうか。リリアナ・オルデンベルクです。」

につこりと微笑みながら皮肉混じりの言葉を告げる。

言外に、私が王女様に仕えてるの見てるだろ、忘れてんのかよと言ってみた。

さあ、分かってるかな？

「はあ？貴方みたいな下賤な女が恐れ多くもわたくしの親友である王女様のお部屋に居るわけがございませんわ！どうやら頭がおかしいようね！」

……だめだわ、これ。

私の身分も分かってなければ、王女様のことも誤解してるし。

彼女、王女様に蛇蝎だかつのごとく嫌われてたんだけど、気付いてないのね……

王女様、いっつもバード公爵令嬢が来た後は私達――部屋付きのメイドに愚痴ってたんだけど。

うん、疲れる。本当に、もう……

バード公爵令嬢の取り巻きらしい少女たちは、どうやら私の身分が

分かったようで、焦った様子で彼女を止めようとしているが、彼女はまったく気付いていない。

あー、なんだか、取り巻きの子がかawaiiそうになってきた……
とりあえず適当にこの場を繕おうと口を開こうとした時。

「失礼致します。じきに宴が始まりますので、お名前を呼ばれた方から、案内に従って移動して下さいませ」

……もう五分経っていたらしい。

バード公爵令嬢は私を見下すような目で睨んでから、さつさと部屋を出て行った。

とりあえず助かった……

そう思って扉のあたりに控えて名前を呼ぶ係のメイドを見ると。

(……………！？アリアがなんでここにいるのー！！！？)

茶色の巻き毛をふわふわ揺らして、にっこにこ愛想笑いを振りまきながら令嬢方の名前を呼んでいるアリアと目が合った。

そう言えば、アリアは確か数日前に会った時、『大役を任せられちゃった！』とはしゃいでいたような。

うわ、どうしよう。

これは後でみっちり事情を説明させられるわ……

心の中でがつくり肩を落とす。あー、こんなことを見落としてたなんて！一生の不覚！

ティナ様が心配そうに私を見上げてきたので、とりあえずにつこり微笑みかけておく。

“大丈夫ですか？バード公爵令嬢……エリーゼ様はしつこく嫌がらせをする事で有名ですし、気を付けて下さいね。アルフレート様がいて下さるから、大丈夫だと思いますけど……”

「ティナ様、お気遣いありがとうございます。気を付けますね」

「リリアナさま、大丈夫ですか？あの人、自分より容姿に優れた方をひどく苛めるんです。私の友達も、ひどいことをされて……」

「できるだけ近付かないように気を付けた方がよろしいですわ」

「そうなんですか……心に留めておきますわ。ありがとうございます」

微笑みながら言うと、何故か皆頬を赤らめて俯いてしまった。……どうしたのかしら。

おろおろしていると、扉の方から私の名前を呼ぶ声がした。もう順番がまわってきたのかしら。

とりあえずみんなに簡単に挨拶をして、扉の方へと向かう。

「リリアナ・オルデンベルク様でございますね？案内の者に従って会場まで向かって下さいませ。……後でみっちり色々説明してもらつわよ」

「……分かりました。」

ぼそりと付け加えられた一言に内心冷や汗をかきながら、私は会場へと向かった。

第13話（後書き）

活動報告に小話を書きました。
興味のある方はどうぞ！「香水の話」。殿下視点の話になります。

第14話（前書き）

投稿遅れてすみません！

第14話

案内された先、物凄く豪華な扉の前。

久しぶりの空気にわずかな緊張を覚えながら、名前を呼ばれるのを待つ。

大広間に入ったら、まず最初に国王陛下に挨拶に赴かなければならない。私の前に呼ばれた人の挨拶が長引いているようで、しばらく待っていて欲しい、と係の方に告げられた。

待つこと数分。中から合図があつたようで、私の名前が呼ばれた。背筋を伸ばし、ぐつと前を見て、ヒールの音を響かせながら中に入っていく。

……

……

……

……視線が痛い!!

なんで誰も喋らないのよ！ちょっと社交界に出てこないだけの、超平凡な伯爵令嬢よ私！顔だつて大したことないし、スタイルだつて普通よ！？今日はメイドさん達に磨き上げられたけど、それでもせいぜい中の上くらいでしょ！？なんでみんな私を凝視するのよ!!！お願いだから他の方を見てください視線が突き刺さってます!!

心の中で絶叫するものの、皆さん喋らないし目を反らしてもくれない。

国王陛下の前にたどり着いても、やはり状況は変わらない。

……私何か悪いことした！？

スカートの両端をつまみ、深々と礼をする。

礼儀作法には自信があるので、これは淀みなくできた。

「……面を上げよ。こういった場では久しいな、オルデンベルク伯爵令嬢」

「お久しぶりでございます、国王陛下。仕事に励んでおりましたので……」

ゆっくり顔を上げて、令嬢らしく、柔らかな物腰で応答する。謁見自体は半年前にもしていたが、この場はとりあえず久しぶりと言った方が無難だろうと思って答えた。

「そなたの父は達者か。王都に戻って来いと何度告げても戻らぬ。」
「父は所領で弟に剣術を仕込むのに夢中で……今度、手紙で私からも催促致しますわ。」

陛下のお誘いを断るって、どんな神経してるのよお父様……！
一応陛下に忠誠を捧げた騎士でしょうが……『忠誠を誓った相手に従うべし』って、家訓でしょうが！

「騎士団に戻って来て欲しいものだ……あの腕前を知らぬ者が増えてきたことが、残念で仕方ない。できれば我が右腕として活躍して欲しい……」

だんだん陛下がしょんぼりしてきちゃってるし！！

とゆうかだんだん愚痴になってきてるし！！

お父様なんで陛下を誑し込んでるのよ！変なところでカリスマ発揮して来ないで……！

お父様は物凄いいつとりしててうつかり下手な詐欺に引っかかりかねないような人なのに、建国時から連綿と受け継がれてきた騎士の血筋故か、凄まじい剣豪なのだ。黙ってさえいれば、娘の目から見ても眉目秀麗な美形さんだし。若く見えるし。

なので、お父様を慕う人は正直多い。私がオルデンベルク伯爵令嬢と知るなり、伯爵の復帰はまだかと聞かれたことすらあった。仕事中のメイドに話しかけないで欲しい。

「……その内、私の様子を見に王都まで来ると思いますので、父にはその時に……」

言いたい事は本人に言ってくれと遠回しに言ってみると、陛下は我に返ったようで、すまないとか言って下さっちゃった。

…すいませんが、仮にも国王が一貴族の令嬢に謝罪って色々マズいんじゃない……
内心で冷や汗をかきつつ、そっと周りを伺うが、とりあえずはひんしゅく顰蹙を買ってはいないようで、安堵する。

「そういえば、塔の者の様子はどうだ。長く続いているようだが」
「ええ、良くしていただいておりますわ。ご心配頂きありがとうございます」
「ざいます」

「そうか。なら良かった。そなたをあやつ付きにして正解だったな。今宵は仕事の疲れを忘れ、楽しんで行ってくれ」

王の言葉に一礼して御前を離れる。

……ああ、驚いた。いきなり殿下のことを聞くから、何かボロが出たかと思つて、寿命が縮んだわ……

私が御前を離れるのを待っていたかのように、広間にいた貴族の面々も会話を再開したので、ちよつと落ち着いた。

だけど、なんかチラチラ見られてる気がする……

でもまあ、好都合だ。

私は広間のすみで壁の花と化していたリヴァプール兄弟の元へ歩み寄っていく。

目下のものから話し掛けるのは無礼に当たるので、二人の目の前まで行つて礼をする。と、アルフレート様がにやりと……にやりと！
？笑つて声を掛けてきた。

「……久しいな、オルデンベルク伯爵令嬢。貴殿とこうして会うのも珍しい。伯爵はご健勝か」

「……ええ、お久しぶりですわ。父は相変わらずでございます。貴方もお元気なようで安心致しました」

できる限り艶やかに笑いながらも、私の心中は混乱の真っ只中だった。

何この人！いくらなんでも性格変わりすぎて気持ち悪いわよ！さっきまであーんなにティナ様をデレデレ構い倒してたのに、一体何なの！？俺様なの！？

傲岸不遜な態度のアルフレート様に心が折れそうになりつつも、なんとか親しげに見えるように演技する。というか、広間の人の目が集中しているのを今度こそはつきり感じる。私にどうしろって言うのよ……！！

しばらくその状態で会話を続けていると、やっと王への挨拶を終えたティナ様が来た。

……のに、アルフレート様はティナ様をすげなくあしらうばかり。見かねたセルシウス様がフォローをしてくれるようになって、私の会話の負担が減ったので、周りを見る余裕ができた。

……うわ、バード公爵令嬢が物凄い目でこっちを睨んでる。リヴァプール兄弟と話してるからか、さっき陛下と親しげに会話していたからか。

まあ、両方でしょうね……めんどくさい。話し掛ければいいのに。むしろアルフレート様も少しはあの子の厄介ぶりを味わえばいいと

思う。

というか周りの人、まだこっち見てるし！

勘弁してください……

話題になるために来てる訳だけど、ここまで見られると、慣れてない身には厳しい……

私は心の中で盛大にため息をついた。

第14話（後書き）

はっ、殿下が出せてませんでした……
っ、次こそは……！！

第15話

そろそろ演技も疲れてきた……

視線は多少減ったものの、見られているだけで緊張感が増す。

というか、僅かに漏れ聞こえてくる会話の内容が私たちのことばかりなのが分かってちよつと嫌だ。いや、本来の目的を考えればこれでいいんだけど、なんというか、聞こえよがしに喋っているのかと思えない。特に私たちの近くにいるご令嬢たちが。

「……ごきげんよう、オルデンベルグ伯爵令嬢？」

……うわ、来ちゃったよ。リヴァプール師団長狙いの令嬢群が。あーめんど。

「ごきげんよう、ノイエ侯爵令嬢さま、バード侯爵令嬢さま」

につこり笑って膝を折る。一応身分的には私の方が下だし。家は私の実家の方が長く続いているから、実質ウチの方が偉いけど。

「ああ、殊勝でいらっしやること。どうせなら身の程も弁えていて欲しかったですわね」

「まったくですわ！たかが伯爵家の娘の分際で、リヴァプール様たちに近寄るなんて……浅ましい下心が透けて見えるようですわ、なんていやらしい。」

……随分言いたい放題いつてくれるわね……

どちらかと言うと、浅ましい下心が透けてるのはあなた達の方だと思っけどね。露骨に色目遣ってるし。

リヴァプール兄弟に色目を遣いつつも、律儀に嫌みを言ってくる侯爵令嬢たち。正直面倒だから言い返さないでいると、嫌みはどんどんエスカレートしていく。

「第一、今までロクにこういった席に出てこなかった鄙者が、こういう席にいる事自体間違っているのですわ！」

「早く領地にお帰りになつたら如何？その辺の田舎者があなたにはお似合いよ！」

……いやいや、出てこなかったって。私正式に参加はしてなかったけど、王女さまの側付きとして参加してたのに。王女さまの側付きは名前こそ盛大に呼ばれたりはしないものの、貴族の参加者の一人に数えられてるし。

……知らない方が常識ないと思うんだけどなあ……
とはいえ、やっぱり反論はしないでおく。だって下手に反論しても彼女たち刺激して状況が悪化したら嫌。

「……ちょっと、聞いてますの!？」

「ああまったく、これだから田舎者は嫌だわ。人の話ひとつまともに聞けないなんて……同じ貴族として恥ずかしいですわ」

……放っておいてはもらえないようだ。

表向きは優しく微笑みつつも、私は心の中で盛大に溜め息を吐いた。

「……失礼ながら、私からリヴァプール公爵様方に近寄った訳ではございません。この場で、陛下を始めとする王族の皆様の次に身分が高くていらつしやる公爵様方に挨拶をしただけですわ。正式にご挨拶した事がございませんでしたので、礼儀として。ただ、以前多少の縁が御座いましたので、挨拶の後に多少お話をさせて頂きました。お話をする際、先に声を掛けるような無作法も致しませんが、何か問題がありましたでしょうか？」

優しく優しく、聞き分けのない子供を諭すかのような口調で言ってみた。とりあえず正論しか言っていない。

ここで下手に突き放すような話し方でもすれば、私の評価が下がる

だけ。冷静になろう。うん。

「……なっ！せっかく親切に注意してさしあげましたのに、わたくしたちを馬鹿にする訳！？」

「ふざけないで頂戴、三流の出の女が！！私を誰だと思っているの、仮にもこの国と隣国の王族の血を引く、バード侯爵家の娘よ！」

顔を真っ赤にして怒られてもねえ……
馬鹿にした訳じゃないし。

「リヴァプール公爵様、なぜこのような下賤な女を連れていらっしやるのです！？」

「そうですわ！こんな礼儀も弁えないような女を連れろくらいなら、わたしたちとっ……」

「黙れ」

アルフレート様が、冷たく突き放すように彼女たちの言葉を遮った。見ると、セルシウス様もとても嫌そうな顔をしている。

「礼儀を弁えない？……弁えていないのは貴様らだ」

「公爵家の人間に、侯爵程度の身分の人間から話し掛けて、許され
ると思っているのか？その程度の常識もないんだな、あんた達は」

みるみるうちに青ざめていく侯爵令嬢たち。

当たり前だろう。自分たちの主張に熱中するあまり、最低限の礼儀
すら失念し、狙っていた男性に蔑むような目で見られているのだか
ら。

「……俺、あんた達みたいな女は好みじゃねえな。」

「ああ、セルシウスもそうだろうな。俺も貴様らのような女は嫌
いだ。派手派手しく着飾って大衆の前で人を貶めようとする女など。
理想の正反対だな。俺は清楚な奴が好きなんだよ」

「どうせ妻にするなら、俺は可愛らしくて賢い奴がいいな。俺と対
等に言い合って、負けない奴。欲を言えば、髪は金茶色で瞳は緑色
の……」

「ああ、この間から言っているじゃじゃ馬娘か。随分好みのようだ
な」

「当たり前だ。あんな面白い子、他にはいないだろ。絶対落とす。」

「せいぜい図書館通いを頑張る事だ。一国の宰相が、令嬢に論破さ
れてくれるなよ」

……

アルフレート様、思いつき好みを暴露しつつティナ様をガン見した。私の目は狂っていないはず。

ティナ様も気付いていたようで頬をほんのり染めている。可愛い。

好みと正反対だと大々的に宣言された令嬢たちは、屈辱に身を震わせて、そそくさとどこかに消えてしまった。

……そして、意図して気付かない振りをしているけど！しているけど、また大広間じゅうの視線が集まってるし……

誰かこの状況を打破……

「静粛に！王立騎士団第二師団長、第六師団長の、入場ー！」

よく通る声で扉脇に控えていた侍従が叫んだ瞬間、私たちに集まっていた視線が、扉の方へ集中した。

空気が一瞬のうちに緊張感を孕み、固まる。

閉じられていた扉が、侍従二人がかりでゆっくりと開かれていく。

誰も、何も言わない。

ただ、じつと扉の向こうからやって来る二人を待つ。

誰かが息を吐く音すら聞こえそうな、静かな空間。

その空間は、広間に入ってきた二人の靴音によって破られる。

かつん

かつん

かつん

単調なリズムを刻む靴音が、徐々に玉座へ近づいていく。

仮面を被った彼が、一瞬私を見た気がした。

かつん

かつん

かつん……

二人は足を止め、玉座の前で騎士の礼をする。

王が、ゆっくりと口を開いた。

「……今回、第二王女を賊から守った事、深く感謝する」

「「光栄に存じます」」

「よって、褒美を与えようと思う。顔を見せ、名を名乗れ」

一拍置いて、第二師団長がゆつくりとした足取りで前へ出た。

「王立騎士団第二師団長、エリオット・ガーファンクル、ここに。」
「貴殿は姫を逃がし、守ったと聞いておる。その際に剣を折ったと聞いたので、今作らせている。近いうちに新しい剣が届くだろう。」
「有り難く存じます」

ゆつくりと一礼し、第二師団長が下がる。

代わって、ローブと仮面を付けた第六師団長が前に出た。

俯いた彼は、フードの中に手を差し込む。

カチリ、カチリ、と音がして、仮面が取れたが、目深に被ったフードのお陰でその顔は伺えない。

彼は無言で第二師団長に仮面を預けると、ローブのボタンを外し始めた。

人々が固唾を呑んで見つめるなか、ついにそのボタンが外され――
彼は勢い良くローブを脱ぎ捨てた。

フードに仕舞われていた長い紫黒の髪が、弧を描いて流れ落ちる。

上げられた面は端正な顔立ち。

赤みがかった紫の瞳は凜と目の前の王を見つめた。

引き結ばれていた唇がゆっくりと開く。

「王立騎士団第六師団長、サファロニア・リーベルド・ラトレイユ、ここに。」

深々と頭を垂れた彼に、誰かが息を呑む音がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1873v/>

令嬢メイドと『悪魔王子』

2011年10月29日19時05分発行